慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	雪村周継の生涯と作品 (四) : 晩年 ~ 没後
Sub Title	Sesson Shukei's life and works (4) : late years to after his death
Author	松谷, 芙美(Matsuya, Fumi)
Publisher	慶應義塾大学アート・ センター
Publication year	2021
Jtitle	慶應義塾大学アートセンター年報/研究紀要 (Annual report/Bulletin : Keio University Art Center). Vol.28(2020/21), ,p.107- 115
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	研究紀要
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11236660-00000028-0107

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

雪村周継の生涯と作品（四）
晩年～没後

松谷　芙美
兼任所員、ミュージアム・コモンズ専任講師

本論考は、『年報／研究紀要 26　2018／19』から継続して執筆している「雪村周継の生涯と作品」の第四部であり、2017 年に開催された「雪村―奇想の誕生―」展の成果をもとに、晩年の作品、および雪村没後の評価等について考察を行うものである。紙面の都合上、図版は最小限となっているため、掲載のない作品は「雪村―奇想の誕生―」展図録（東京藝術大学大学美術館／読売新聞社発行、2017 年）をご参照いただきたい。また、本文中の印章の分類も上記図録による。

1．晩年（七十歳初～八十六歳頃）

雪村は七十歳の時、奥州田村（三春）で作画を行い、鶴船の号を用いた（『図絵宝鑑』狩野素川著、慶安二年（1649）成立）。福島県三春には、雪村が晩年をすごした庵の跡が現在も残っている。その庵に伝わる扁額の裏には由緒書が認められており、「八十余年前、僧雪村あり」と記されている。この由緒書は、明暦四年（1658）一元紹碩によるもので、実は、雪村の生没年を知る手がかりはこの記載のほかない。つまり、この記述より逆算して、天正五年（1577）頃まで、雪村は雪村庵で過ごしていたと推定できる。当時三春は、田村隆顕（？～ 1574）、清顕（？～ 1586）が治める三春城（舞鶴城）があり、雪村は田村氏の庇護のもと、作画を行ったと考えられるが、会津や故郷の常陸との往来は引き続き行われていた[*1]。

最晩年の代表作のうち、人物画には、「周継」朱文長壺印（O 印）の下部が欠失した P 印とともに、「雪」白文楕円印（L 印）、「雪村」朱文酒樽印（N 印）が捺された≪孔子観欹器図≫（図 1、大和文華館所蔵）、≪布袋図≫（N 印）（板橋区立美術館所蔵）、≪自画像≫（L,N,P,O 印）（大和文華館所蔵）がある。これらの作品を通して晩年の人物画の特徴を述べたい。≪孔子観欹器図≫≪布袋図≫≪自画像≫は、ともに細い描線に彩色が施されるため、面貌はやや生々しく感じとられる。七十一歳の≪竹林七賢図≫（畠山記念館所蔵）とその描法を比較すれば、制作時期にある程度の隔たりがあると推測出来るだろう。太い墨線でゆったりと縁取られていた衣の襞は、やや震える細い墨線を幾重にも引き重ねた表現に変化している。≪呂洞賓図≫（大和文華館所蔵）≪竹林七賢図≫（畠山記念館所蔵）の大きく見開いた丸い目は、超人的な人格を表現していたが、晩年の人物画では、その表現は薄れ、まぶたを幾重にも引き、目尻が垂れ、身近な人や自分自身が投影されているようだ。これまでいくつも描いた布袋にいたっても、≪布袋図≫では、彩色が施されることでより、生身の人間としての人格が際立つ。≪自画像≫は、その主題からも一層その傾向が強い。

≪孔子観欹器図≫は、近世の儒者、林羅山（1583 ～ 1657）が、

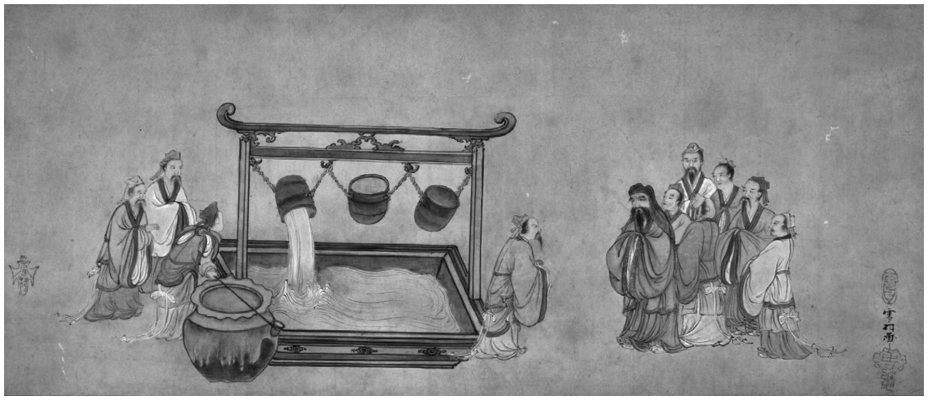


図１　雪村周継筆≪孔子観欹器図≫大和文華館蔵

図２　伝雪舟等楊筆≪欹器図≫（「旧大名御蔵品入札」目録より）

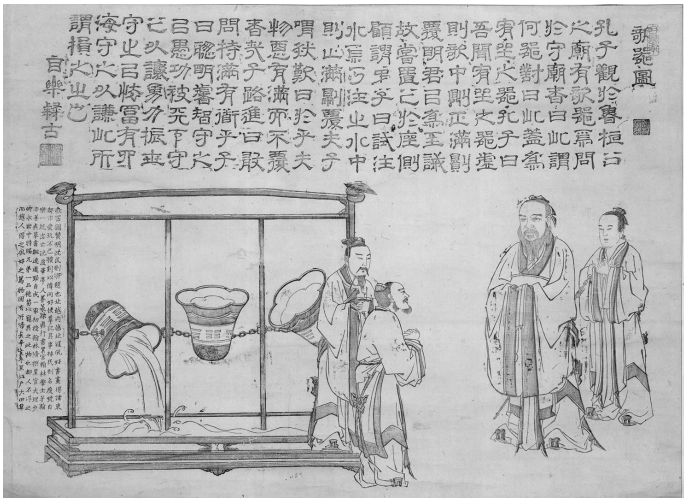


図３　内藤北涯作≪欹器図≫足利学校遺蹟図書館所蔵

足利学校に立ち寄った時、永享十一年（1439）に上杉憲実が寄進した「孔子観欹器図」を見たという『日光紀行』の記事を根拠とし、足利学校に寄進された「孔子観欹器図」を元に描いたものであり、雪村と足利学校のつながりの一端を示す作品としても紹介されてきた*2。近年の研究としては、山田烈氏の論考が詳しい*3。ここでは、山田氏の先行研究を参考に、雪村が本図を描くにあたって参考にしたであろう「孔子観欹器図」について考えたい。

≪孔子観欹器図≫は、孔子が弟子に命じて欹器に水を注がせると、水を満杯に注いだ場合は、傾いて中の水がこぼれ、空にしても傾き、適度に入れた場合のみ釣り合ったという、いわゆる「腹八分目」を説いた逸話を描いたものである。画題としては、日本には室町時代、三教一致の思想とともに入ったと考えられ、15 世紀頃から絵画化されたようであるが、類例は少なく、15 ～ 16 世紀の周楊筆≪欹器図≫、伝雪舟筆≪欹器図≫（図２、「旧大名御蔵品入札」東京文化財研究所売立目録、美研 -1828）、伝狩野元信筆≪孔子十哲図屏風≫（「原田二郎翁第一回」東京文化財研究所売立目録、美研 -2033）に欹器が描かれている。周楊は雪舟の弟子で、売立目録に見いだせる伝雪舟筆≪欹器図≫と、欹器の数が異なるものの、人物の数、服飾表現等がほぼ共通している。この≪欹器図≫と群像表現や服飾表現が類似する作品が、足利学校に所蔵されている≪欹器図≫（図３、足利学校遺蹟図書館所蔵）である。本図向かって左手前の人物は、伝雪舟筆≪欹器図≫と人物の姿勢が共通し、右側の群像表現は、伝雪舟および周楊筆≪欹器図≫のうち、手前横向きの人物が削られているが、姿勢や服飾表現に共通点がある。

本作品（図３）は、寛政三年（1791）に内藤北涯が模刻し

た版画で、沈度の賛と、太田南畝（1749 ～ 1823）の文があり、南畝の文には、

「欹器図賛明沈民則所題也、北越内藤北涯夙好書画、得諸東都市愛玩不已、模刻以伝同好使覃記其事、按民則名度号自楽、一統志云沈度華亭人、善篆隷真行書、累官翰林学士第翰亦善真草書、飄逸遒勁自成一家、初授翰林修撰、累官大理少卿永楽中特賜兄弟一品袍笏以寵異之此物也、都人不得之而越人得之、夙好之篤物固有所帰矣、辛亥冬至江戸大田覃」（読点は筆者が適宜付した）

とある。南畝も記す通り、沈度（1357 ～ 1434）は、明の松江華亭の人、字は、民則、自楽と号した*4。沈度の賛が付された、14 ～ 15 世紀に明で描かれた欹器図が、この版画の原本であったことが記されている。この版画の原本である明時代の欹器図がすなわち、永享十一年、上杉憲実が寄進した「孔子観欹器図」であると結びつけるのは早急かもしれない。しかし、類例の少ない「欹器図」であり、かつ現在この版画が足利学校所蔵であることは、見過ごすことは出来ない事実だと筆者は考える。また周楊や伝雪舟筆≪欹器図≫とも共通する構図であることからも、これらの原本となる明時代の「欹器図」の存在を仮定できるだろう。

図 4　雪村周継筆≪官女図≫部分

図 5　雪村周継筆≪孔子観欹器図≫部分　大和文華館所蔵

雪村筆≪孔子観欹器図≫とこれら 3 点の「欹器図」を比較すると、雪村画の、孔子と群像中最も右手に位置する横向きの弟子、欹器の前で孔子と対面する人物、欹器に向かって左側に位置する 3 名のうち腕を組む中央奥の人物の計 4 名は、周楊や伝雪舟、北涯が模刻した版画それぞれの部分から引用している。雪村はその 4 名に、後ろを振り向く人物を加えながら群像表現としたと考えられるのではないだろうか。雪村は、≪官女図≫（図 4、「雪村－奇想の誕生－」展図録 no.40）等、背面からの横顔の人物像を好んで描く傾向が見られる。≪孔子観欹器図≫にも柄杓を持つ後ろ向きの人物が描かれるが、他の「欹器図」には見出せない上に、袖を背後で結んだ姿は、本図中で最も臨場感がある（図 5）。この人物の前かがみの姿勢と、臀部下で蝶結びされた帯は、≪美人宴集図≫雪村周継模本（図 6、東京国立博物館所蔵）にも同様の表現が確認出来る。右幅向かって左側の、背中側から横顔を見せて描かれた女性は、≪孔子観欹器図≫の人物と同様に、前かがみの姿勢で、面貌は描かれずに、耳と頬のみを覗かせる上、帯を臀部下で蝶結びにする着衣表現も共通している（図 7）。

≪美人宴集図≫は模本であるが、「周継」朱文重郭方印（H 印）が書き写され、原本は小田原鎌倉滞在期の作品であったと推測できる。女性の面貌表現や特徴的な漆台の四ツ脚の形状（図 8）が先の≪官女図≫（図 9）に似るほか、漆台や欄干に金泥で描かれた唐草文様（図 10）は、雪村が好んで描いた文様で、≪書画図≫（大和文華館所蔵）の欄干の模様（図

図 7　≪美人宴集図≫部分　東京国立博物館所蔵 Image：TNM Image Archives

図6　≪美人宴集図≫雪村周継模本　東京国立博物館所蔵　Image：TNM Image Archives

11)、≪釈迦羅漢図≫（善慶寺所蔵）の羅漢の袈裟の縁裂の模様に、バリエーションが見られる。また、≪美人宴集図≫右幅の官女たちが座す台や書院のような棚が、雪村以外には想像できないような、想像力に満ちた独創的な形状をしている点が目を引く。書院には行体様の水墨山水画が掛けられ、官女たちが広げる巻子は瀟湘八景図巻の洞庭秋月図らしい場面が描かれている。玉澗様の瀟湘八景図巻を手がけた小田原鎌倉滞在期の作品として矛盾しない細部表現である。興味深い模本であるが、詳細は別に記したいと思う。以上から≪孔子観欹器図≫は、雪村が明代絵画を発想の源とし、≪美人宴集図≫にも先例がある背面向きの人物を加えることで、孔子を取り巻く逸話の場面を臨場感豊かに仕上げた作品と考えることが出来よう。晩年に至るまで、足利学校と繋がりを持ち、新たな画題に取り組んだことを物語る作例として重要である。

続いて人物像のうち、最も晩年の制作と考えられるのが、≪自画像≫である。本図には、自作の詩が記され「山川一色綿よりも白し、茅屋斜に連なり淡煙を籠む、興尽きて棹を回して去るに如かず、柴門流水月明の前」とあり、当時知られた「王子猷溪雪乗舟」の故事をもとに、それぞれ一節目は「雪」、二節目は「村」、三節目は「船」、四節目は「月」、つまり「雪村」「鶴船」の意味が読み込まれている。四節目の「月明前」と「継雪村老」の款記には不自然なほど余白がないことから、「月明の前の雪村老」つまり、この絵の月光が照ら

図 8　≪美人宴集図≫部分
東京国立博物館所蔵 Image：TNM Image Archives

図 9　≪官女図≫部分

図 10　≪美人宴集図≫欄干部分
東京国立博物館所蔵　Image：TNM Image Archives

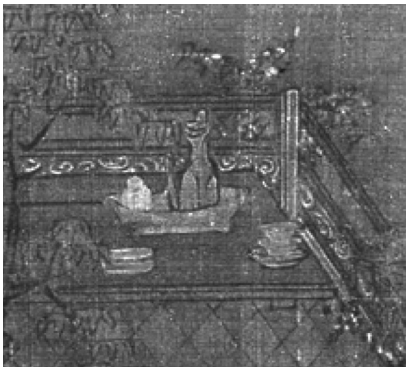


図 11　≪書画図≫欄干部分　大和文華館所蔵

す雪山の前に座す老人が雪村であることを示している[*5]。描かれた像の面貌も個性的ながら、賛と印を用いて自己のあり方を強く主張するこの≪自画像≫以上に、雪村が自分自身を語った史料はない。

最後に、山水画の晩年の傾向を簡単に紹介したい。代表作は≪金山寺図屏風≫（L,N 印）（笠間稲荷美術館所蔵）、右隻がシアトル美術館、左隻が栃木県立博物館と、その断簡である≪漁村山水図≫が正木美術館に分蔵されている≪山水図屏風≫（L,N,P 印）が挙げられる。そして、≪瀟湘八景図屏風≫（黒田家旧蔵）（L,N,P 印）は「八十六歳」の款記があり、現存する最晩年の作品である。

≪金山寺図屏風≫は楷体の山水図で、鋭角な山型を連ねた波頭と、豊かな彩色が特徴である。山岳のなかに溢れんばかりに楼閣を描きこんだ非現実的な空間表現にもかかわらず、木の葉の一枚一枚を描き、楼閣内部の人物は、細部まで描きこまれ、一挙一動を想像できるほどの臨場感を持つ。一方、≪山水図屏風≫（シアトル美術館、栃木県立博物館、正木美術館に分蔵）は、丸みを帯びた山岳表現が特徴的な、楷体と行体の中間に位置する山水図である。様々な筆跡で木の葉を描き分け、鋭角な山型を連ねた波頭や、人物を中心に淡彩が施される表現は、≪金山寺図屏風≫と通じる。最晩年の≪瀟湘八景図屏風≫（黒田家旧蔵）は、行体から草体の中間に位置する水墨の山水図で、例えば雪山を象る輪郭線や、墨を垂れ流したような雨の表現などの、伸びやかで大胆な筆使いが目

を引く作品だ。このような力強い自由な線を、老僧が描いたと考えた時、その充実した気力に驚く。非現実的ともいえる山岳表現と、細部描写から生まれる臨場感は、上記二作品と共通している。右から「瀟湘夜雨」「平沙落雁」「洞庭秋月」「遠寺晩鐘」「江天暮雪」の場面が描かれ、行き交う旅人たち、雁の群れ、家屋は、やや震える筆線でありながら、丁寧に描写されている。例えば、蓑に身を包んだ人物が木陰に舟を泊める「瀟湘夜雨」の場面は、鑑賞者に雨の冷たさや匂いを想起させるほど生き生きとしている。雪村は生涯を通して繰り返し「瀟湘八景図」を描き、八景の図像的特徴が、それぞれ定形化していく。しかし本図は、定型化したそれらの図像が、晩年においても実在感を失わずにあることを証明する。この作品において、単純化の最終段階、つまり無駄のない自在の境地に達したと言っても過言ではない。雪村は、この作品を描いてまもなく、おそらく1577年頃までに、三春の雪村庵でその生涯を終えた。

2　没後―江戸末期の雪村評価と『説門弟資云』について

「雪村周継の生涯と作品」（一）～（四）では、雪村の作品や、関連する史料を時代ごとに整理、分析することで、彼の人生を紐解いてきた。雪村は、作品以外にその生涯を語る史料を残さなかったが、その死後、作品は多くの人々の心をつかんだ。特に江戸時代に入ると、「雪舟在西邊、雪村居東極」と評され（『本朝画史』1693年）、雪舟に並ぶ中世の名画家としての地位を獲得、かの尾形光琳（1658～1716）や谷文晁（1763～1821）にも影響を与えている。

雪村が著したとされる画論『説門弟資云』は、谷文晁が文化八年（1811）『文晁画談』（東京国立博物館所蔵）において紹介し、酒井抱一（1761～1829）は「酒井抱一記録」（『国華』65号掲載）中に書写し、菅原洞斎（1762～1821）は『画師姓名冠字類鈔』に掲載している。雪村の作品を紐解く上で、説得力のあるその内容は、しばしば先行研究で作品を解説する際に引用されてきた。しかし、林進、小川知二両氏がその信憑性の問題について触れられ、成瀬不二雄氏の論考が発表され[*6]、現在は偽書とほぼ結論づけられている。しかし、なぜこのような書が作り出されたのか。小川氏はそれを谷文晁、酒井抱一、菅原洞斎が、雪村やその作品を熱く崇拝した結果とし、最良の雪村論でもあると評価された[*7]。ここからは、『説門弟資云』誕生の背景について、先行研究を補強するとともに、彼らが雪村の作品をどのように学び、理解したのかを紐解きたい。

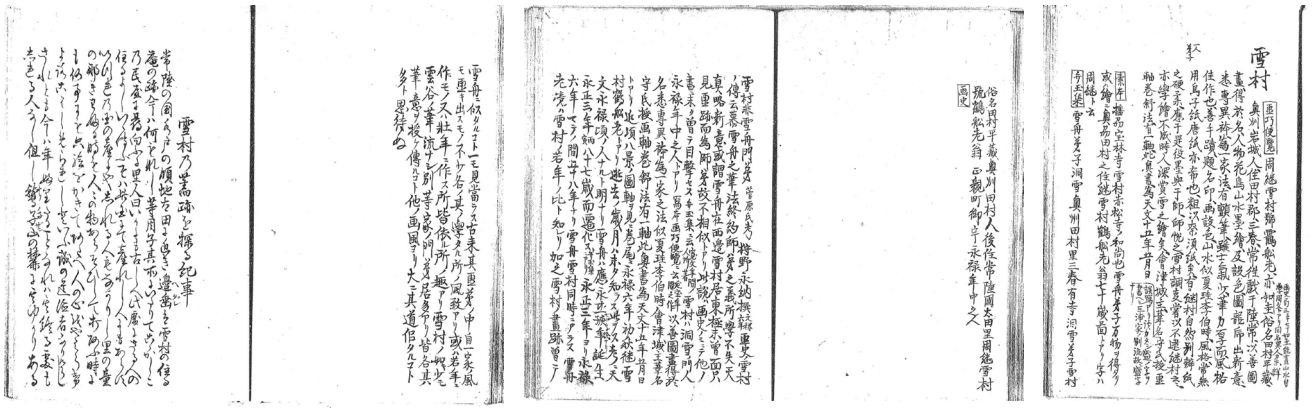
雪村自筆の『説門弟資云』は現存せず、先行研究においては、『文晁画談』「酒井抱一記録」『画師姓名冠字類鈔』に書写された文章が繰り返し引用されてきた。「酒井抱一記録」中の『説門弟資云』は、『国華』65号（国華社、明治二十八年（1895）二月十一日発行）に「酒井抱一ノ記録中等周子カ翁ノ旧跡ヲ尋ネタルノ一事アリ左ニ其文ヲ録セン」と記して、引用されたもので、原本は存在せず、「酒井抱一記録」自体の実在を疑われることもあった。この記録によると、等周子という画師が、大貫山より十六里半離れた鷲子山の麓で、雪村に仕えた小縣某という人物の子孫に出会い、『説門弟資云』を写したという発見談が記されている。

菅原洞斎編『画師姓名冠字類鈔』（13巻、国立国会図書館所蔵）では、上記の発見談は語られず、「此書（『説門弟資云』）ハ常州辺垂の田郷ニ雪村ノ親族アリテ某家ニ貯あるとて或ノ借覧シテ写し来りとて石川大浪君御持参被下候」とあるのみである。この国立国会図書館所蔵本は写本であるが、全巻が揃い、先行研究において度々活用されてきたものだ。そのような中、菅原洞斎自筆『画師姓名冠字類鈔』稿本3冊（慶應義塾附属研究所斯道文庫所蔵）が、古筆学研究者である小松茂美氏（1925～2010）の蔵書中から発見された。これは『画師姓名冠字類鈔』（国立国会図書館所蔵）の巻第2、3、7に対応し、紙背の一部に「雪村」の項目の書き損じが見出されたが、残念ながら「雪村」の項目は確認できなかった[*8]。

さて、雪村研究ではこれまで取り上げられてこなかった資料をここで紹介する。観嵩月（1755～1830）編著『画師冠字類考（エ）』（登録番号73／41、岩瀬文庫所蔵）の「セの部」「雪村」の項目には、『画工便覧』（伝新井白石著、寛文十二年（1672）刊）『素川本図絵宝鑑』（狩野素川信政著、慶安二年（1649）刊行）『弁玉集』（著者不詳、寛文十二年（1672）刊）から引用した雪村の略歴と、落款が書写され、「雪村の旧跡を探る記事」『説門弟資云』が掲載されている（図12 1-8）。本書には、「文化十三年六月冠字考再々校合済」とあり、所々に「菅原氏曰」とあるほか、『画師姓名冠字類鈔』から落款印章を多数写している。特に「雪舟」や「雪村」の項目においては、『画師姓名冠字類鈔』で印文まで写されているもの（図13）が『画師冠字類考』では輪郭のみで、印文が省略されている箇所（図14）が多くあることから、洞斎から情報を得て、編集したと考えられる。一方で、観嵩月は、英派の高嵩月（1730～1804）門下の絵師であるため、英一蝶・勝川春章門下等の資料は充実しており、新出情報が見出されている[*9]。

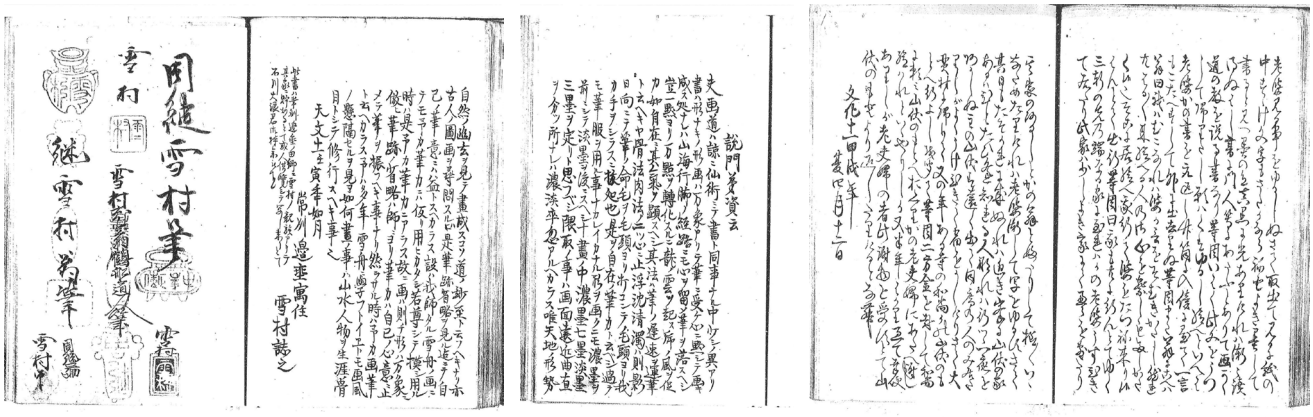
この観嵩月による『画師冠字類考』「雪村の旧跡を探る記事」は、「酒井抱一記録」に掲載されたものと同じ『説門弟資云』が見いだされた経緯を述べた文章であるが、文末に「文

図 12 『画師冠字類考（エ）』雪村の項（登録番号 73 ／ 41、西尾市岩瀬文庫所蔵）

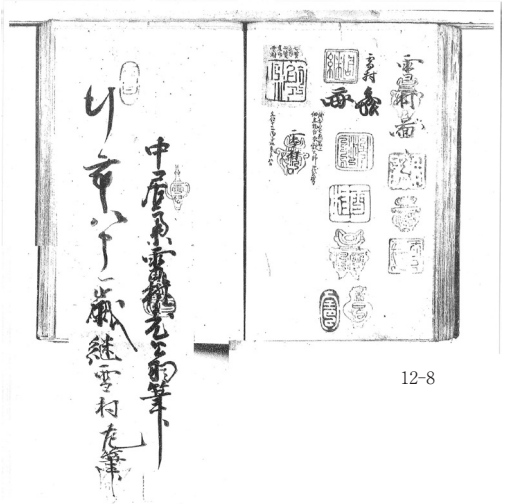


12-1　12-2　12-3

（12-4 は本論では未掲載）



12-5　12-6　12-7



12-8

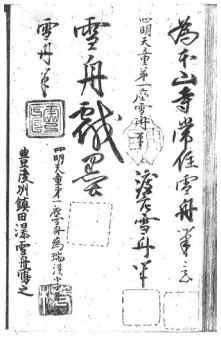


図 14 『画師冠字類考（エ）』雪舟の項（登録番号 73 ／ 41、西尾市岩瀬文庫所蔵）

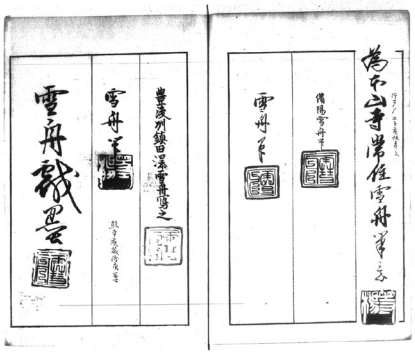


図 13 『画師姓名冠字類鈔』巻 13 雪舟の項（菅原洞斎著、国立国会図書館所蔵）

化十一甲戌年夏四月十二日」という、この記事の執筆年月日が記されているのは、本書のみである（図 12-5）。文化八年刊行の『文晁画談』に『説門弟資云』が引用されているが、「雪村の旧跡を探る記事」の執筆年がそれより三年遅れてしまうことになり、解釈が難しい。『説門弟資云』が先に見つかり、その発見の経緯についての説明を三年後に改めて文章とすることで、その信憑性を高めたのだろうか。年記が明らかな書籍のうち、『説門弟資云』に関するもっとも早い言及は、『文晁画談』ということになる。

さらに、『画師冠字類考』では、雪村の略歴を引用したのち、菅原洞斎から得た雪村考が、様々な資料を挙げて述べられている（図 12-2,12-3）。洞斎の雪村に対する理解が伺える文章なので以下に引用したい。

「**雪村非雪舟門弟（菅原氏考）狩野永納撰（元禄六年）画史ノ雪村ノ傳云**、慕雪舟之筆法、終約師弟之義、所學不失天真、略新意或謂雪舟在西邊、雪村居東極、未曾面、只見画跡而為師弟、故不相似**トアリ、此説ハ画史ノミニテ他ノ書ニ未タ曽テ目撃セス、弁玉集ニ云（寛文年間ノ人所著）**雪村ハ洞雪ノ門人永禄年中之人**トアリ、寫本画巧便覧ニ云（延宝年間之作）**以善國畫得於名、悉専異体為一家之法、似夏珪李伯時、会津城主葦名守氏授画軸巻舒法、有一軸、此奥書為天文十五年五月日**トアリ、近頃八景ノ圖軸ヲ見ニ、巻尾ニ永禄六年初秋継雪村鶴船老トアリ、逝去ノ歳月ハ未タ知ラス、此ヲ以考ニ、天文永禄頃ノ人ナルト明ナリ**　雪舟ハ應永廿一（庚子）年（**七の字誤ナリ**）誕生永正三年（丙寅）八十七歳而遷化ス（**ト弁玉集ニアリ**）　永正三年ヨリ永禄六年マテノ間五十八年ナリ、雪舟雪村同時ニアラス、雪舟老境ハ雪村ノ若年ノ比ト知レリ、加之雪村ノ畫跡、曾テ雪舟ニ似タルコトーモ見當ラス、古来其画弟ノ中、自一家ノ風モ画キ出スモノ不少、各ノ其ノ學タル所ノ風致アリ、或ハ若年ニ作モノ、又ハ壮年ニ作ス所、皆依ル所ノ趣アリ、雪村ノ如キ少モ雲谷ノ筆流ナシ、別等家ノ門弟居多アリ、皆各其筆意ヲ授ケ傳ルコト、他ノ画風ヨリ大ニ其道侶タルコト多ト思侍ぬ**」（（ ）内は本文の補記部分。筆者が読点を適宜付した。）

太字部分が洞斎からの聞き書き部分と考えられ、それ以外は引用部分である。雪舟と雪村の生没年が 58 年近く開いていること、その画風が異なることを説明している。狩野永納著『本朝画史』の「雪村居東極」という説を、「此説ハ画史ノミニテ他ノ書ニ未タ曽テ目撃セス」と否定的に捉えている点が興味深い。これら先行研究としての画人伝、画論類の記載に加え、洞斎が実見した「永禄六年初秋継雪村鶴船老」とある八景図巻を根拠とし、雪村は、天文永禄頃の人物と判断している。このような洞斎の分析や研究態度は、現在の美術史研究者と同じと言って良いだろう。洞斎が見た「永禄六年初秋継雪村鶴船老」の款記を持つ八景図巻は、現在米国のウォルター美術館に所蔵される≪倣牧谿瀟湘八景図巻≫（「牧谿中軸」）であり、その落款印章は、『増訂古画備考』（朝岡興禎著、太田謹補、明治三十八年（1905））にも所載されている。

洞斎の言葉で語られる後半部分には、「雪村ノ畫跡、曾テ雪舟ニ似タルコトーモ見當ラス」と言い切り、「他ノ画風ヨリ大ニ其道侶タルコト多ト思侍ぬ」というように雪村の僧侶としての面が、その画風に現れているという考えがはっきりと述べられていることに注目したい。『説門弟資云』の冒頭は、「夫画道ハ諒ニ仙術ニテ、書ト同事ナル中、少シノ異アリ、書ハ形ナキノ形、画ハ万象アリテ、筆ニ受ケ心ニ點シテ、画キ成ス処ナレバ、山海行脚ノ経路ニモ、心ヲ留メ筆ヲ落スベシ。」（（『画師姓名冠字類鈔』より。読点は筆者補）とあり、雪村の画風は、絵師である以上に諸国を行脚した僧であることに因ること、さらには、雪村の描く仙人らの境地を重ねるような文言で始まる。また、「設ハ我師タル雪舟ノ画ニテモ予カ筆力ニハ仮リ用ヒカタシ」「予ハ多年雪舟ニ学フトイエトモ画風ノ懸隔セルヲ見ヨ」というように雪村は雪舟を師と仰ぎながらもその画風が大きく隔たることが述べられている。洞斎は雪舟が雪村の直接の師ではないと述べているが、わざわざそれを断わるのも、往時は雪舟が雪村の師であるという考えが主流であったことを前提とすれば、『説門弟資云』の主張は、洞斎の雪村考と共通するようだ。また『説門弟資云』は文末に「天文十一」とあり、雪村の活躍年も洞斎の考える「天文永禄頃ノ人」と合う。

『画師冠字類考』においては、上記の通り、『説門弟資云』から想起される雪村像に近い洞斎による雪村考が記された後、「雪村の旧跡を探る記事」『説門弟資云』が掲載されている。『文晁画談』では『説門弟資云』が引用されるのみで、その発見の経緯等は記されないし、「酒井抱一記録」は発見の経緯を掲載するものの、記事の前後関係等は、原本が存在せずに確認ができない。このような状況下で、『画師冠字類考』所載の記事は、これまで紹介されたなかで、もっとも原本に近い『説門弟資云』発掘の経緯を記した文書と言える。さらに、『画師冠字類考』には、『説門弟資云』を引用した文末に、洞斎著『画師姓名冠字類鈔』と同じ「此書ハ常州辺垂の田郷ニ雪村ノ親族アリテ某家ニ貯あるとて或人借覧シテ写し来りとて石川大浪君御持参被下候」の由来が記される。つまり、本書『画師冠字類考』における『説門弟資云』および、雪村項の情報源は、洞斎であると考えて差し支えないだろ

う。『画師冠字類考』は、洞斎からの聞き書きであったため、かえって彼の著作以上に、ダイレクトに洞斎の雪村考が文字化されたと言えるだろう。

洞斎は、先述したように先行する画人伝の記述を収集し、作品を実見し、その落款印章を書写した。たとえば『画師姓名冠字類鈔』において、「雪村」の印譜欄には、山水之絵に押された印の横に「正印とは見へなし疑くは後人ノ偽作なりや」といったコメントがあるように、鑑定家として真贋判断もしていた。洞斎ら秋田藩のお抱え絵師らの模写した模本が、千秋文庫に多数保存されている。洞斎が描いた模本には、中国絵画の梁楷、趙雍、仇英、呂紀、張路、鐘礼ら、日本の水墨画の明兆、相阿弥、雪舟、秋月、雲溪永怡、仲安真康、賢江祥啓（現在は式部輝忠と判断される作品を含む）らがあり、中国絵画と水墨画への関心、造詣の深さが現れている。筆者は洞斎の目を追うことで、『説門弟資云』の謎に迫ることができるのではないかと考えている。大きな課題を残して本稿を終わるが、洞斎らの視点を通して、室町水墨画の新知見を得るべく、引き続き調査分析を進めたい。

註

＊1　松谷芙美「雪村の生涯と作品（三）奥州滞在記前半≪呂洞賓図≫から≪竹林七賢図屏風≫へ」『年報／研究紀要 26　2018／19』慶應義塾大学アート・センター編集・発行、2019 年 7 月、140 ～ 150 頁

＊2　林進『水墨画の巨匠 第二巻 雪村』講談社、1995 年、102 頁

＊3　山田烈「雪村筆孔子観欹器図考」『東北芸術工科大学紀要』no.15、東北芸術工科大学、2008 年 3 月、147 ～ 136 頁。図像の典拠の検討に加えて、比較作品や関連資料が詳しく紹介されており、以下のとおり、足利学校旧蔵の「孔子観欹器図」の裏面の識語が引用されている。

「関東八州副総管兼房州刺史藤原憲実寄進下野州足利学校永享十一年己未閏正月初吉」

福井保「林家と足利学校」（『長澤先生古稀記念　図書学論集』三省堂、1973 年）所収

＊4　「沈度」『中国美術家人名辞典』上海人民美術出版社出版、1981 年、426 頁

故宮博物院データベース「沈度」（https://www.dpm.org.cn/court/figure/104052.html）

＊5　林進「『雪村自画像』の構造」『新規開館記念特別展 雪村―常陸からの出発―』図録、茨城県立歴史博物館、1992 年

＊6　成瀬不二雄「雪村周継の画論『説門弟資云』についての疑い」『美術史論集』1 号、神戸大学美術史研究会、2001 年 2 月、1 ～ 13 頁

＊7　小川知二「谷文晁、酒井抱一、菅原洞斎の雪村崇拝―雪村の画論『説門弟資云』の謎をめぐって―」『雪村－奇想の誕生－』展覧会カタログ、読売新聞社、2017 年

＊8　一戸渉『描かれた古－近世日本の好古と書物出版』慶應義塾大学附属研究所斯道文庫、慶應義塾大学アート・センター発行、2016 年

＊9　観嵩月および『画師冠字類考』については以下の論考に詳しい。

井田太郎「観嵩月という結節点」『書物学』第 8 巻、勉誠出版、2016 年 8 月

神谷勝広「勝川春章伝記小考」『浮世絵芸術』第 173 号、国際浮世絵学会発行、2017 年 1 月

図版出典

図 1、4、5、9、11　『雪村―奇想の誕生―』展覧会カタログ、読売新聞社、2017 年

図 2　「旧大名御蔵品入札」東京文化財研究所売立目録、美研-1828

図 3　史跡足利学校事務所提供

図 6、7、8、10　東京国立博物館提供

図 12、13　西尾市岩瀬文庫提供

図 14　国立国会図書館提供

謝辞

東京国立博物館で特別観覧をさせていただきました。同館の高橋真作先生には、作品の閲覧でお世話になりました。また本稿執筆にあたって画像や情報提供等の協力を賜りました皆様に、御礼申し上げます。

附記

本稿は、平成二十九年度センチュリー文化財団赤尾記念基金研究補助「菅原洞斎『絵師姓名冠字類鈔』自筆本の美術史学・書誌学両側面からの研究」および、令和元年～二年度日本学術振興会科学研究費補助金（研究活動スタート支援）「模本および画人伝資料の調査を通じた江戸時代後期の室町水墨画の受容」（19K23019））の成果の一部である。